様式第２号

平成２７年度　　独 創 的 研 究 助 成 費 実 績 報 告 書

平成２８年３月３１日

<table>
<tr><td>申　請　者</td><td>学科名</td><td colspan="2">看護学科</td><td>職 名</td><td>助教</td><td>氏 名</td><td>井上　かおり</td></tr>
<tr><td>調査研究課題</td><td colspan="7">看護学生のヒューマンケアリング実践力向上に関する研究</td></tr>
<tr><td rowspan="3">調査研究組織</td><td colspan="2">氏　　名</td><td colspan="2">所属・職</td><td colspan="2">専門分野</td><td colspan="2">役割分担</td></tr>
<tr><td>代表</td><td>井上　かおり</td><td colspan="2">看護学科・助教</td><td colspan="2">老年看護学</td><td colspan="2">研究総括・学会報告</td></tr>
<tr><td>分担者</td><td>實金　栄
山口　三重子
二宮　一枝</td><td colspan="2">看護学科・准教授
看護学科・教授
看護学科・特任教授</td><td colspan="2">老年看護学
基礎看護学
地域看護学</td><td colspan="2">調査・分析・学会報告
調査,考察協力
調査,考察協力</td></tr>
<tr><td>調査研究実績の概要</td><td colspan="7">
研究目的
本学看護学科では，「深い人間理解を基盤にしたヒューマン・ケアリングが実践できる能力を養う」ことをねらいとし，コミュニケーションに関する知識の習得や模擬患者を用いた演習，チームガバナビリティ演習を開講している．3年次からはヒューマンケアリング論を開講し，後期からの臨地実習に活かすことができるようにしている．しかしながらそれらの評価は，ヒューマンケアリング論および各領域臨地実習で個別に行っており，4年間の就学課程を通してのヒューマンケアリング実践力の総合的な評価とは言えない．
そこで，本研究では，看護学生のヒューマンケアリング力向上のための教育プログラムへの示唆を得ることをねらいに，就学年次別のヒューマンケアリング実践力とその関連要因を検討することを目的とした．
調査対象
本学看護学生1～4年生169人のうち，分析項目に欠損のない142人を対象とした．
調査方法
無記名自記式質問紙調査
調査内容
性，年齢等の基本属性，ヒューマンケア行動調査票[1)]，コミュニケーション・スキル尺度[2)]，社会人基礎力[3)]を調査した．
調査期間
1～3年生は2015年4～5月，4年生は全ての臨地実習が終了した10月とした．
分析方法
学年による尺度得点の差の検定はKruskal WallisおよびMann-Whitney，尺度得点間の相関はSpearmanの順位相関係数を用いた．
倫理的配慮
本学倫理審査委員会の承認を得た．調査への同意は調査票の提出をもって得たものとした．
結果
ヒューマンケア行動合計点およびコミュニケーション・スキル合計点は，1～3年生まで学年を重ねるごとに増加したが，4年生では減少に転じた．3年生は他学年に比べ有意に高い点数を示した（$p<0.01$ Bonferroniにより算出）．社会人基礎力合計点は，1～3年生まで学年を重ねるごとに減少し，4年生で増加に転じたが，学年間での有意差はなかった．最も合計点が低い3年生と増加に転じた4年生の下位因子項目に着目すると，「シンキング」の中の「創造力」のみ有意差がみられた（$p<0.01$ Bonferroniにより算出）．
尺度得点間の相関については，ヒューマンケア行動合計点とコミュニケーション・スキル合計点には正の相関がみられ，コミュニケーション・スキルの下位概念のうち，「表現力」「自己主張」を除く「自己統制」「関係調整」「解読力」「他者受容」において高い正の相関（Spearman's $\rho=0.66$～0.82）がみられた．ヒューマンケア行動合計点と社会人基礎力は負の相関であった（Spearman's $\rho=-0.43$）．
</td></tr>
</table>

	考察 　ヒューマンケア行動合計点およびコミュニケーション・スキル合計点はいずれも4年生で減少に転じる結果となった．これは，学年を重ねるごとにヒューマンケアリングおよびコミュニケーション・スキルに関する知識は身につくものの，臨地実習を通してその実践の難しさを知り，自己を厳しく客観視した結果であると考えられた．ヒューマンケアリング力を育てるためには，まずは教員自身が学生の人格や価値観を尊重し，学生の感じたことや考えたことを通して知識と実践を統合できるような指導の在り方が重要になると考えられた．社会人基礎力については，下位因子項目である「シンキング」の中の「創造力」において有意差が見られたことから，臨地実習における体験を通して，様々な情報や状況を統合し創造する能力が向上した可能性が考えられる．しかしながら本研究は横断調査であるため，同一集団の学年進行に伴う能力の変化とは言えない．来年度も引き続き調査を行い，比較検討していく必要がある．また，ヒューマンケアリング行動やコミュニケーション・スキルは4年次で低くなっていたことより，知識や実践力が向上していても，自己を厳しく客観視できるかどうかによって変動すると考えられた．したがって今後，1年次は入学時と基礎看護学実習Ⅰ修了時，2年次生は基礎看護学実習Ⅱ修了時，3年次は領域実習開始前，4年次はすべての実習が終了した時と，客観的に自己評価できるよう時期を変更して次年度からは調査を実施していきたいと考える． **参考文献** [1] 竹尾恵子，ヒューマン・ケアの看護実践への具現化，日本看護研究学会雑誌28（1）13－17，2005 [2] 藤本学，コミュニケーション・スキルの実践的研究に向けたENDCOREモデルの実証的・概念的検討，パーソナリティ研究22（2）156－167，2013 [3] 北島洋子，細田泰子，星和美，看護系大学生の社会人基礎力の構成要素と属性による相違の検討，大阪府立大学看護学部紀要17（1）13－23，2011

成果資料目録	第42回日本看護研究学会学術集会（2016年8月開催）において，下記演題として発表予定である． 1）井上かおり,實金栄,山口三重子，看護学生のヒューマンケアリング行動とコミュニケーション・スキルの関連 2）實金栄,井上かおり,山口三重子，看護学生の社会人基礎力のヒューマンケア行動への関連